

---

# Knight in night ~それでも世界を愛すのか?~

AvEl

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Knight in knight ～それでも世界を愛すのか～

### 【Zコード】

Z7130Y

### 【作者名】

AVE1

### 【あらすじ】

イルミネ学園普通科一年、【暁さくや】は住み慣れない土地で一回目の春を迎えようとしていた。

個人が持つ魔導ランク重視の『魔導科学社会』において、（最低）ランクGを持つさくやは待っていたのは、激しい拒絶と暴力だった。それでも、誰に弱音を吐くこともなく耐えてこれたのは、『最愛の姉』があつてこそだった。

これは一人のシスター・コンプレックスな青年が、矛盾に満ちた世界を駆け抜け、そんな物語。

### 『更新状況』

『第一話（完成）投稿しました』

携帯で見る方は、本文改行二倍推奨です。

本文はリズムを崩さないよう書きませんが、感想、指摘、改善点がありましたら宜しくお願いします。

なお、題名についている「」は改正を示します。

## プロローグ

00

もし【暁さくや】について語ることがあるとすれば、彼は極度のシスター・コンプレックスであると言つことだけだ。

彼の原動力は『姉』の存在であり、学園の成績もその目立たないようにしていた性格も、全ては姉に迷惑をかけぬようと心掛けていたものだった。

『魔導ランクA』で国立魔導研究所に勤務する優秀な姉に対して、『ランクG』という事実上魔力が無い彼に出来ることと言えばそれくらいしかなかつたからだ。

神様はとても残酷で、平等過ぎると彼は思つていた。  
血の繋がつているはずの姉弟にも関わらず、先天的な能力が天と地程差があつたからだ。

『人間は産まれた時から平等じゃない』

それを知つていた彼は、せめて姉の汚点とならないように努力を重ねた。

『魔導科学社会』に置いて、魔導ランクはほとんどそのまま社会的地位になる。

この国を含め、平等と謳つていてる全ての国の上層部は全員優秀な魔導ランクを持つてゐる貴族たちばかりだ。

神様は平等だ。

公平にサイコロを振つてゐるに違ひない。

だから何が言いたいかつていうと、こんな卑屈に卑屈を重ねた思考を持つ青年【暁さくや】を語るのは、本人たる俺からしてみても、

なんと言つが意味なんて無いんだと思う。

ただひとつだけ言いたいことがあるとすれば、俺自身は誰もが世界史で学ぶ『次元大戦』を終結に導いた『勇者』であつたり、それと対をなした『魔王』や『魔神』じゃないつてことくらいかな……。

だからこれから語るのは、誰にでもあるような話。

もしかしたらこれを語つているのは、今読んでるあんただつたかもしれない サイコロを振つている神様から見れば、あんただつて俺だつてそう大差は無いはずなのだから……。

世界は矛盾で満ち溢れている。

嘘じやない

そんな不満を抱えながら俺 【暁たへや】あかつきは絶えたことのない暴力に身を任せていた。

薄汚れた狭い路地のコンクリート壁は、鈍い音でもよく反響させる。

背中から両腕をホールドされ無理やり立たされている俺の体力は、とっくに限界を越えていた。

今は呼吸をするだけでも辛い。

「死ねや……」

とかなんとか言つて、じつせ殺す勇気なんて無いんだが……

口先だけの威勢のよさに俺が頬を釣り上げると、口元から生暖か

い液体が頬を伝った。さっき顔を殴られた時からだろつ 鉄独特の味が口に広がっている。

下校する時まで真っ白だったワイシャツが、いつの間にか黒と赤が禍々しく彩っていた。

全身が苦痛で悲鳴をあげていたが、声を上げるわけにはいかない。

こうなることは予想出来たはずなのに、どうして自分は大人しく“あいつ”を待つていなかつたのだろうか？

まあ、今更悩んでも仕方がない

皮肉れた自分に自嘲し、我慢していた笑みが思わずこぼれた。

「 つ、てめつ！！」

顔を伏せていたにも関わらずそれが見えたのだろうか、相手の暴力の激しさが拍車をかけて増した。さっきより重い拳があばらに響いた。

「 あ……」

垂れ下がっていた視線を少しだけ持ち上げたが、分かったのは先輩達の怒りがおさまりそうにないことだけだった。

今日もまた別の人達みたいだ

今日で何人目になるだろうか。

同学年からの暴力がこの一年で減ったのは事実だ。

でも、俺を疎ましいと思っているのが同じ年とは限らないことも

事実だった。

何度も殴られた腹部は、自衛機能を発動している。意識もしてないのに筋肉が硬くなっていた。

そりや、一時間も殴られれば、そうなるか……

殴られ続ける中、俺は妙に他人行儀だった。慣れといつもの怖い、さつさと氣絶してしまえば楽になるのに……。

振りかぶった勢いのいい右フックが急所である溝内を直撃した  
というのに、もうあまり痛みは感じない。

いつまで続くんだろ？……と、麻痺してきた感覚につきだりして  
きた。

「おー！何してんだー！」

「やべつ、逃げるぞ！」

狭い路地なので、感覚が麻痺しかけている俺にも、その声はよく耳に届いた。

突然、名前はおろか、顔すら知らない『普通科』の先輩達の暴力  
が終わりを迎えた。

自分の保身の危機を感じたのか、俺をいたぶっていた先輩達は、  
地面に置いていた自身の鞄を拾い上げ、逃げるよう而去つていった。  
暴力から解放された代わりに、支えを無くした俺は力なく膝をつき、次いで仰向けに倒れた。

冷たいコンクリートが内出血で火照った身体を冷やしていく。  
気持ちがいい。ここで意識を手放せば心地いい夢の世界に旅立てる気がした。

きっと血溜まりの中で漂つ夢になるだろ？

「警察呼ぶか？」

頭に直接響く音声に、重くなつた臉を仕方なく持ち上げると、革靴が目に飛び込んできた。靴には細かい傷がいくつもついていた。

「こりねえよ……」

お姉ちゃんに心配をかけるよつなことはしたくない。

俺は声をかけた男にそう言いつつ、軋む<sup>きし</sup>両腕でボロボロになつた身体をなんとか持ち上げる。

「 つっ……」

力を入れた場所が激痛を帯び、小さく呻き声を漏らしてしまつた。立ち上るのは諦め、身体を捻り上半身だけ起き上ると声をかけた赤髪の顔がそこにあつた。

「だから、待つてろつて言つたのに」

俺の惨状を見て、悪友【ケイ・インター・ラル】は小さく溜め息をついた。

しゃがんでいたケイが立ち上ると彼の短い前髪が小さく揺れた。いつもなら待つているのだが、今日は理由<sup>わけ</sup>があつた。それは俺にとって全てに優先される。

早く帰つて部屋を掃除したい

明日はお姉ちゃんが帰つてくる予定なのだ。

「立てるか？ シス！」

やう言つて自力では立てないでいる俺に、ケイは右手を差し出した。

「地の文読むなよな……」

俺が右手を差し出すとケイは、「何言つてんだ？」お前」と笑いながら、任せに引つ張つてくれた。

「 で、なんで待つてくんなかつたんだよ？」

俺に肩を貸すケイが、近くに転がっていた俺の鞄を拾い上げた。

「補習になつた奴を待つてやるほどできてないんだよ、俺は」

口に溜まつた血を路地に吐き捨てた。

やつぱり切れてやがる。当分、辛いものは厳禁になりそうだ。

「じゃ、これは俺を置いていった天罰だな、きっと」

「これからは待つてろよな」と、複製音が付きそつたケイの台詞に互いの笑みをこぼした。

狭い路地を抜けると、風に流された桃色の欠片が視界の隅を通り過ぎた。

俺達を迎えてくれた街路樹の桜が、真上から降り注ぐ暖かい光で一層輝いていた。

また、長い一年が始まる。

02

「おっ、同じクラスで良かつたな」

腕を組んで、隣に立つ男が独り言のように呟いた。俺より早く名前を見つけたのだ。

男の着ている学園指定の肩章がついた黒いブレザーからは、だらしなく弛んでいる赤いネクタイが見えた。  
左胸には誇張するよに学園のエンブレムが輝いている。

「何組？」

自分の名前を見つけるのがめんべくくなつた俺は、同じ制服を着ている男に聞き返した。

750人もいると自分の名前を見つけるのも乐じやない。

映画館の銀幕みたいな白い電子パネルに生徒の名前が広がつている。一年前同様、嫌気がさしてきていた。

どうせなら、こう全校生徒が中央広場に集まらなくとも、前もつて自宅に郵送してくれたらいいのに……。

「……待て、見失った」

そう言つてクラス表を再び眺め始めた友人ケイ・インター・ラルは、一年やそこらの付き合いでは、頭が良いのか悪いのか分からぬ。そんな友人から目を離した俺は、巨大なクラス表を眺め、果報を待つことにした。

知らない名前が多い。

「お……あつたあつた」

ケイがパズルが解けたときのような軽い声で呟いた。

今度こそ忘れないように視線がゆっくりと上っていく。

「で、何組？」

周りの生徒が、こそそと俺を見るのが少しずつ不快になつてきていた。

ただでさえ人混みがあまり好きではないのだ。急かすようにそつけなく言った。

俺の方に向き直ったケイの跳ねた赤い髪が愉しそうに揺れている。

嫌な予感しかしない

校舎の窓から見る景色は一年前とずいぶん違っていた。

それは一年の教室が三階にあるというからではない。

いや、物理的にはそれで正しいのだが、俺 暁さくや自身の変化が一番大きいのだと思う。

視線を伸ばして行くと、巨大な塔にぶつかる。白くそびえるその建物の上部には、学園を象徴する盾に類似したエンブレムが掲げられている。

『生徒会室』だ。

いや、もはや部屋とかいうレベルではない。ないのだが、入学のパンフレットや案内板にそう書かれているのだからそういうのだろう。

『魔導科』が支配するこの学園の象徴とも言える『そこ』に、本來なら『普通科』の生徒はあまり縁がない。

無いはずなんだけどなあ……

いや、別に俺が生徒会のメンバーだつり生徒会のお助けキャラクターやわけではない。

そこには“何故か”一度程お世話になつて、今では現職の生徒会長に名前を覚えられてしまつている。

さて、そこから視線を右にずらすと見えてくるのは、『魔導科』の校舎だ。

ここイルミネ学園には、他の学園同様『普通科』と『魔導科』が存在する。

違いは優秀な魔力の持ち主か否かだ。その点では他の学園と変わらない。

『魔導科学社会』の『ご時世だ。

魔導科が無い学園の方が少ないだろう。

学園はそんな魔力持ち有利になつた社会に慣れさせる為の場でもある と、俺自身は思つたりしている。

『普通科』と『魔導科』の校舎は基本的には変わらない。田立つた違いといえば、『魔導科』のグランドにはドーム型の薄い魔法障壁が張られていることくらいだ。

さて、更にそこから右に

「ちょっと聞いてるのかな？ 暁さくやくん」

腫れていらない右頬が冷たい何かでつつかれた。振り向くと、なにげに食い込んでくるので痛い。

150人弱のクラスメイトがクスクスと小さな笑いを広げている。きっと今の俺の顔は相当まぬけなのだろう……なんとなく納得できてしまつ。

授業用の電子パネルを背に教壇に立つ一年A組の担任【モモネ・ミカゲラ】女史が、自身の『魔力』を用いた光る指示棒を伸ばし、俺に突き付けている。

何故ケイがあれほど不気味な笑顔を浮かべていたかは、ホームルームが始まつてこの教師が教室に入つてきてすぐ分かつた。

「さくや、貴様羨ましいぞ！」

そう言つて隣の席を立つたのは勿論、あの愛すべき馬鹿代表ケイ・インターラルだ。  
めんどうかいので詳細は省くが、ケイはあの女教師が大好きなのだ。

まったくあんなおっぱいだけの女のビニがいいのか……

確かにモモネ・ミカグラ女史は官能的な体を持っている。自身の赤みがかつた黒髪を短く切り揃えたセミロングは男子たちには好印象だし、美人な部類なのだろう。

まあ、俺の好きなタイプじゃないけど……

「 で、何の話でしたっけ？ モモちゃん」

先生に對して敬語を使うのは当たり前。ただし呼称は除く。

「 なんでそんな怪我してるか聞いてたんだけど…… 聞こえなかつたかな？」

伸縮自在の光る指示棒を自分の手元に戻したモモちゃんは、額を小刻みに動かしている。もう少しすれば、今辛うじて繕っている笑顔も剥がれるだろうに。

正確には聞こえないようにしていたのだが、そんなことを言えばモモちゃんの怒りのバロメーターが振り切れるのは言つまでもない。モノローグ風に学園の脳内解説をして、質問を逃れようとした俺の作戦は失敗。いや、むしろ悪化しているように見える。

それでも笑顔を保つていられるのは、俺達の担任が一年目だからだろうか。

モモちゃんが俺の扱いを覚えてしまった気がする ケイと一緒に。

なんというかケイと一緒に、それこそファーストフードセットのポテトみたいに思われるるのは意義申したいところだ。けど、俺がハンバーガーのもの、それはそれで何か嫌だ。

「 知りたいですか？」

キリッ、と効果音がついてもいこよつた目付きに、演技をかけて台詞を吐いた。

突然鋭くなつた俺の目付きてモモちゃんは

「無駄にシリアスな顔しても駄目よ」

あきれた風に溜め息をついた。

いや、結構シリアスだつたりするんだけど……と心の中で呟いておく。

「始業式の帰りに先輩に絡まれて、この有り様です」などと言つたあかつきには、クラス中から、哀れみと不快感に溢れた眼差しを浴びることになる。それに、今からだと有効期限はほぼ一年。

それは流石にドMと自負する俺でもきつい戦いになるだろう。

「わくわく……早く話してしまえ。これ以上、俺のモモちゃんを困らせるな……」

何故かさつきから席を立つてゐるケイが、右手を腰にあて俺を諭すように言った。雰囲気だけは一人前だ。

「ありがとうございますケイ君、でも私は貴女のものじゃないわよ」

その容赦無い担任の即答に、立ち上がつたばかりのケイが机に伏せて崩れた。その際にガラスが割れたような音がした気がするが、氣のせいだろう ケイの心の厚さは防弾仕様のはずだ。

それにケイの立ち直りの早さは人類一だから、心配はいらないだろ。

むしろ問題なのは、モモちゃんの方がイライラを隠せなくなつていること というか俺のシリアスを返せ、友よ。

クラスの皆もこんな戯れに長くは付き合つてくれないようで、グ

ダクダな空気が流れかけていた。

潮時だな……

あたかも観念したように、一息ついてモモちゃんの口をロックオ  
ン。

会話をしていく始めて口を合わせられたからだろう モモちゃん  
が息を飲んだ。

「近所の大型犬と死闘を繰り広げた……その勲章です」

俺は誇らしげに腫れた左頬を指差した。所謂、ドヤ顔というやつ  
だ。

因みに大型犬がいるというのは本当だが、吠えることすらしない  
人懐こい犬だ。

俺の返答を聞いたモモちゃんが、いつの間にか片手で頭をおさえ  
ていた。

モモちゃんが俺に聞いたことを後悔しているようこみえるが  
まあ、気のせいだろう。

「はあ……後で犬に謝つときなさいよ」

落胆したモモちゃんは、教員簿を片手に疲れきった様子で教室を  
後にした。

結局、俺の「はーい」という無責任な責任で、新学年最初のホー  
ムルームは幕を下ろした。

教室に終鈴が鳴り響くころには、隣で崩れていたケイも立ち直っ  
ていた。

いそいそと帰り支度を進めるクラスメイトの中で、俺は一人窓の  
向こう側を見つめ直していた。

通学用の鞄を肩にかけ校舎を出ると、目に飛び込んできたのは、使用済みになつた電子掲示板を片付けている先輩達と、生活指導部の【ゼルト・グレンツェ】だった。

黒いスーツを着たゼルトは、先輩達が最後の電子掲示板を取り外すのを見守つていた。

ゼルト・グレンツェ その鋭い隻眼はイルミネ学園生活指導部長を寡黙のまま知らしめる。

灰色の短髪と隻眼、そしていつも着ているネクタイ無しのブリーフケースからついた渾名は、【灰色の悪魔】。

俺はこいつが苦手だ。他の生徒よりも百倍は苦手だ。  
こいつだけは、入学当初から俺に眼を光らせていた。

それが妄言で無いことを証明するよつに、今だつて俺が視界に入つただけで近付いて来ている。

ゼルトの背中では電子掲示板を外した先輩達が、ありもしない雰囲気を察して作業の駆け足で作業を進めていた。

ゼルトが俺と距離を詰めてきたので、半歩退いた。

「何かやましいことでもあるのか？」暁也くや

不意に立ち止まつたゼルトは、腕を組んだまま淡々とした口調で問いかけてきた。その表情からは、感情の欠片さえも見受けられない。

「無いです。ゼルト先生こそ何か？」

悪魔のような眼光に慣れたわけじゃない。ただの痩せ我慢だ。それに、多少の怪我は日常茶飯事だ。はつきりと言い切るに限る。ゼルトの薄灰色をした隻眼に、揺れる俺の表情が写し出された。

自身が黒い眼帯を付ける結果になつた『次元大戦』を導いた一人と言われていることはある 4月上旬だつてのに、冷や汗が垂れ下きた。

「おい、さくや待てって……げ……」

昇降口から俺を追いかけてきたケイは、俺にたどり着く前に足を止めたようだ。不意にかけられた声に、自分の肩をピクリと跳ね上げてしまった。

「インターラル、何か言いたそうな顔だな」

助かった……

ゼルトが俺から目を反らし、後方にあるケイに視線の先を向けたからだ。

一方、向けられたケイは「な、なんでも、ないっす！」と普段使わない言葉を繰り出すというテンパリようだ。

離脱の機会は今しかない。俺はさりげなくゼルトに背を向けて、  
その場から離れようとした。

「さくや」

無視は出来なかつた。

流石、歴戦の元・軍人は厳しい。おそらくケイに視線を定めたま  
ま、かけられたゼルトの声に身体が硬直した。

「来年も居たければ、大人しくしているんだな」

「え……」

振り返ると、ゼルトは解体現場の監督に戻つていた。着ているス  
ーツが濃厚な黒に染まつてゐる。

俺は後ろ髪を引かれながらも、中央広場を後にした。

気になる台詞だったが、一いちから関わることはごめんだつた。

イルミネ学園には様々施設がある。

相対する一つの校舎、巨大な二つのグラウンド、部室塔、生徒会室、

少し離れれば学生主導の『学園都市』が広がっている。  
そして、『教会』。

「おー、さっさき置いてこいつとしただろ？」「

教会へ続く階段、すれ違つ生徒もそれほど多くないわりに長い。  
いや、長いのだ。

決して高地に立つてゐるわけではない。自転車なら余裕で上れる  
ゆる~い階段なのだ。

「人のこと言えねえだらうが……」

肩にかけた通学用の鞄の位置を直しながら振り返る。  
ケイは半歩遅れて付いてきていた。中々の不機嫌具合だが、  
言い返してこないのは図星だからだらう。

「はあ……止めだ止め

「うふ、あほらしい……」

少しだけにらみ合つた後、ケイと俺は張つていた肩の力を抜いた。  
俺達はそこまで子供じやなかつた（ケンカ仕掛けている時点では  
は疑わしいのだが……）。

「 で、誰に会いに行くんだよ」

俺と同じ段位に上がってきたケイが、肩を並べた。  
「知り合いのシスターだよ」

「牧師だつたら踵きびすを返してた……」

なんて薄情な奴だ。

でも、よくよく考えてみれば、俺は付いてくれとは一言も言つていいない。多分、俺一人で帰らせたくないからだろうが……。

俺としては助かるのだが、何故そうまくしてくれるのでかと聞くのは何となく恥ずかしいのでうやむやにすることにする。

そんなことを考えているといつの間にか目的地に着いていた。

十字架を屋根に掲げた教会の壁には、幻想的なステンドグラスが南を向いている。学園創立から建っている教会の壁が真っ白なのは、教会のシスター や牧師が日替わり交代で磨いているからだ。まるで森を切り開いたような平地に教会が建てられている場所からは、高低差のおかげで学園都市が顔を覗かせていた。

こいつ見てみると、階段は緩やかだが、けつこうな距離があるみたいだ。

まあ、魔導科の生徒達からすれば、転移魔法で一瞬の距離だけどな……

教会に来るまで人とあまりすれ違わなかつたのは、けつしてシスター や牧師が少ないわけではない。むしろ多いくらいだ。

「あつ、さくやさん！」

つと、知人の登場だ

声のした方へ振り向くと、腕の中にウサギを抱えた小さなシスターさんが駆け寄ってきた。

教会の白い服装に合わせるように、少女の長い髪は白銀に染まっている。

大きな碧色の瞳は、どこぞの生活指導部長とは違い、慈愛に満ち溢れている。

彼女 シアノ・セリッド・ノンネは、今年、イルミネ学園に入学したばかりの一年生だ。

六年制のイルミネ学園では一番下の後輩となるわけだが……、なぜそんな彼女と俺が知り合いかと言つとシアノはこの教会に拾われた、つまり孤児だからだ。

一年前、逃げ場所を探していた俺が見つけたのがここ、小高い丘に建てられた教会。

シアノは毎回、傷だらけで逃げ込んでくる俺の話し相手になつてくれていた。教会に拾われた彼女がこの学園に入るのは自然の流れだった。

「入学おめでとう、シアノちゃん」

俺はそう言ってシアノちゃんの頭を撫でた。

何か褒めてあげたりするとき、いつするのが彼女との暗黙のルールだった。

気持ち良さそうに手を組めたシアノちゃんは、俺が手を引けると顔を上げた。

「やべやべとも進学おめでとう」「やべこねすー。」

「え、あ……うん、ありがとう」

キラキラした瞳でシアノちゃんが俺にこう囁いて、隣にいるケイは笑いをこらえるのに必死そうだった。

シアノちゃんに悪気がない分、さらに面白いのだろう あとで殴つておひつ。シアノちゃんに笑顔で返事をする俺は、密かに決意を固めた。

「それじゃまるで俺の進学が危なかつたみたいに聞こえるよ」なんて満面の笑みであるシアノちゃんに言えるわけがない。

「また怪我してますね……」

シアノちゃんは俺がよく我をしているところを見てくる。よく治癒魔法で治してもらつたことはまだ記憶に新しい。

平気だよ、と頭を撫でて上げたが、今回は不安の色を消してくれなかつた。

「やう言えば、何て言ひ宗派なんだ？ 宗教には疎くてね」

仲間に加わりたかつたのか助け船を出してくれたのかは分からないが、笑いを噛み殺したケイが教会を見上げながら首を傾げた。

「主神コスモスのアルカティアっていう宗派、だよね？」

記憶力にはそれなりの自信があつたが、一応シアノちゃんに確認をとる。

「はい。ここに来る人達は、皆主神コスモスの恩恵を授かつています」

胸の前に手を組んだシアノちゃんは目も閉じている。まるで誰かに感謝をしているようだ。

シアノちゃんの純粋さは、無宗教の俺にもは煌々しく見えた。シアノちゃん周辺の空気が澄み切つて見える。

ふと、視界の隅に素早く動く白い何かが映つた。

「シアノちゃん？」

「ふえ……ー？」

俺が声をかけるとシアノちゃんが純粹なのはいいが、時々トロップしゃべりになるのが玉に傷だ。きっと主神と交信でもしているのだろう。

「うわあ、逃げちゃったよ?」

シアノちゃんの腕の中から逃れた、白いもふもふしたうさぎは教会の方に駆けっていました。

「あー！ シノちゃん！」

「せきの前はシノちゃんと言ひっこい。

「せきの逃亡に気付いたシアノちゃんは、あたふたしながらも追いかけていつしまつた。

結局、シアノちゃんの背中に軽い挨拶だけで、俺達は教会を後にすることにした。

教会から学園に戻ると生徒はほとんどなくなっていた。

中央広場にあつた巨大な掲示板も跡形無く撤収され、いつも通りに戻っていた。

「帰るか？」

「ああ、お姉ちゃんも帰つてくるしな」

俺は左手に付けた腕時計に目を落としながら頷いた。  
イルミネ学園の校門は『普通科エリア』と『魔導科エリア』の中間に存在している。

生徒会室を基準に学園は普通科エリアと魔導科エリアに分かれているのだが、巨大な校門は一つだけしかない。  
20メートルの城壁に囲まれたイルミネ学園を出入りするには、  
その巨大な校門を潜らなければいけない まあ、抜け道はあるよう  
だが……。

校門には駅の改札機のような機械があり、学生証がないと通れない仕組みになつていて。学生証を機械の一部に触れさえすればいいという、シンプルな構造だ。

先行するケイが学生証を用意したの見て、俺も制服の内ポケットから学生証を取り出そうとした時だった。

魔導科エリアの方から歩いてきた生徒と目が合つた。

「ん……？」

「 っ……！？」

菖蒲色の髪を後ろで纏めた女子生徒に少し驚かれた。

傾きかけた太陽は彼女の顔を赤く染め、手入れされている髪を輝かせている。いつもならアメジストのように輝く鋭い瞳が小刻みに

揺れている。

イルミネ学園指定の青いチェックのミニスカートからはすらりと伸びる白い足、紺色のネクタイを手前に反り返す一つの膨らみ。相変わらずいいスタイルをしている女子生徒に俺は声をかけた。

「久しぶりだな、クレハ」

名前を呼ばれた女子生徒【クレハ・アリスコード】は表情を崩さない。それどころか歯を食い縛り、何か言いたげな そんな鋭い雰囲気だ。

「…………

睨み付けられたその瞳は、まるで親の敵を見るよう。

俺は何かしたのだろうか？

俺は疑問を抱えながら、睨まれる凛とした瞳に数秒付き合っていた。

しかし、とくに何があるわけでもなく、クレハは俺に背を向け黙つて校門を通り過ぎて行ってしまった。

終始敵視された俺は何がなんだか分からず。願わくは、状況を誰かに説明して欲しかった。

「振られたな…………

「…………！？」

まだ校門を通りていなかつたケイが、俺の後ろでぼそっと呟いた。後ろを向くとケイはすぐそばにいた。いつの間に近付いてきたの

だろう、全く分からなかつた。

「まさか、さくやが【氷帝】……お前の姉への愛情はそんなものだつ、へぶつ！」

俺が平手で顔を抑えたため、ケイが台詞を最後まで言つことはなかつた。少し強く叩いたせいか、ケイは後ろにたたらを踏んだ。

「耳元で叫ぶな。それに俺は凜姉りんねえ一筋だつて」

自分でも不思議だつたのは、やけに冷静だつたことだ。

そのおかげか、鼻をさするケイは「……まあ、そつだな」と素直に納得してくれた。

「……つてか、あの女はアリストード家だぜ？ なんでお前知り合いなんだよ」

俺はケイが言つていた【氷帝】の方が気になつたが、先に答えてやることにした。別に隠すような事では無かつたからだ。

「俺が極東地方にいたときな、偶々知り合つたんだよ」

俺が幼い時に極東地方に住んでいたことは、既にケイに話していた。お姉ちゃんの仕事の都合でこちらに引っ越ししてきたのは、ほんの数年前のことだ。

「幼なじみ……つてことか？」

「さあな、それに相手はアリストード家の御令嬢だ。そろそろ俺とは縁を切りたいのかもな」

アリスコード家は、有名貴族の中でも名高い家系だ。普通なら俺のような生徒が声をかけるのは躊躇われる。俺もそりそろ社会に順応する頃合いのかもしない。

内ポケットから学生証を取り出し校門を通り抜ける。大人しくなったケイも俺に続いて通り抜けた。

学生都市は今日も賑やかだった。いや、新学期といつもより騒がしいかもしない。

まあ、学園祭には劣るがな

まだまだ先の話しだが、学園祭はイルミネ学園の年間行事における三つの内、全生徒が参加できる最大の行事だ。去年は散々な目にあつた分今年にかける思いは大きい。

去年は去年、今年はまともな学園生活を送るようこじょう

騒ぐ学生の間をゅつくりと歩きながら、俺とケイは学園都市を通り抜けていった。いつもなら寄り道する食堂も立ち読みしていく書店も今日は無しだ。

今年の学園生活は少しだけ楽しめそうだ。

イルミネ学園に通う生徒の大半は寮に住んでいる。親元を離れたいだとか、朝遅くまで寝ていられると評判も上々な学生寮は、学園都市の西側に存在する。

しかし、学生寮が重宝される理由は実のところ、金銭面が大きい。イルミネ学園を含む学園都市から外部に出るには、大きく分けて三つの道が存在する。

一つは、主要道路。魔導科学が生んだハイブリットの自動車が日夜激しく行き交う。主に物資等が運ばれてくる。

二つ目は、転移魔法だ。自分で転移魔法を使うのもいいが、学園都市の数カ所には、特定の場所に移動できる『転移ポート』が存在する。長距離転移はある程度の魔力が必要となるため、魔導科の生徒もよく使う。

最後、とは言つても、最もポピュラーな手段は学園都市に繋がるモノレールに乗ることだ。

四方を海に囲まれた学園都市はこうして、外界と繋がりを持つている もつとも、外界とは言つても限られた区域だが……。

「じゃあな」

「ああ、凜々子さんに宜しくな」

ケイに短い別れと共にモノレールから降りた俺が立っているのは、学園都市から20分にある駅のホームだ。

ここで降りる学生は少ない。それは単純にここ周辺の土地の値段が高いからだ。つまり、金持ちしか住めない地域なのだ。

それは駅を降りれば、誰でもすぐ理解できるだろう。駅前から広がる街は、人で溢れかえっていた。

ビル群は天を貫かんとばかりに建ち並び、自分が谷底にいるよう

だ。狭く切り取られた空には、小さな飛行機雲が青白のストライプを描いている。

いつもの光景　人が集まるには殺風景過ぎる街　に溜め息をついてから、俺は歩き出した。

何を話しているか分からぬ他人の声がBGMになるだけで、この街の住人は満足のようだ。

俺が住んでいる高級マンションは、駅から徒歩五分のところにある。たどり着くまでには色々な店が立ち並んでいたが、どこも立ち寄る気にはなれなかつた。高級と名高いだけあり、マンションのセキュリティは万全だ。

だから、部屋の鍵なんかを無くすと大変面倒になることになる。詩的に言えば、発達した社会の思わぬ落とし穴といったところか。

「…………あれ…………」にいれた気がするんだけど、「うーん…………あれ？」

そして、その穴にはまつっている女性が一人。俺の住む部屋の前でしゃがみこんでいる。慌てた様子の彼女は、愛用の鞄の中身をかき混ぜたにもかかわらず、困り果てているみたいだ。

長い黒髪はいつになつたら切るのだろう、彼女の身長からして膝辺りまでのびてゐるはずだ。

彼女は後ろから忍び寄る俺に全く気付かず、「どうしよう……」と、か細い声で沈みきつてゐる。

これで魔導ランクA、イルミネ学園首席卒業と詮つのだから、多少疑いたくなるのも無理もない。

後ろに立つと、しゃがんで縮こまつてゐる彼女が一層可愛く見える。

抱き締めてもいいだろつか？

普段は滅多に見れない彼女の姿に、そんな欲望がふつぶつと湧き

上がつてくるのに対し、曉やくやの理性軍は苦戦を強いられている。時間が経つに連れ、寝返るやつらも出てきていた。

「凛姉」

「ひやつ……」

声をかけると、年齢に反して小さく一體がピクピクと跳ね上がった。

「可愛い……」

声をかけたのが俺だと気付いたからだ。最愛の姉である【曉  
凛々子】は、しゃがんだままこちらに向き、俺を見上げた。

黒曜石のように純粋な瞳が俺を射貫く、目尻はキラリと光る小さな水滴が浮かんでいる。瞳や前髪の漆黒を際立たせているのは、彼女の顔が精巧に作られた人形のように整っているからでもある。

「まつたく、また鍵なくしたの？」

「う……」

凛姉は氣まずやうに田を反らした。田尻に溜まつた涙が零れそうだ。

彼女が鍵を無くすのはいつものことだ。研究所から家に帰つてくる時は、八割方忘れてくる。

「ふう……凛姉」

「…………」

俺が声をかけると、うめき声ともれる消えてしまった。その返事が返ってきた。しゃがんままの凛姉がゆっくりとこちらを見上げ直す。

俺の口から出る言葉を待つていうように、凛姉の大きな瞳は揺れていた。

「おかえり、凛姉」

そう言つて右手を差し出した。

「…………」

少しだけ躊躇つた後、凛姉は黙つて俺の手を受け取つた。乗せられた小さな手は、思つていたよりも冷えていた。

「ただいま……」

凛姉はそっぽを向いたまま呟いた。

凛姉の照れる姿は珍しい　俺はすかさず脳内フォルダーに保存した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7130y/>

Knight in night ~それでも世界を愛すのか?~

2011年11月25日20時58分発行